

## 小説家 Trollope が郵政省勤務から得たもの

齋藤 九一

### 1

ヴィクトリア朝の主要な小説家の一人である Anthony Trollope (1815-1882) は、小説家と郵政省の役人を兼ねていた。郵政省に入ったのは 1834 年 (19 歳)、小説家としての第一作の出版は 1847 年 (32 歳)、郵政省退職は 1867 年 (52 歳) なので、役人生活 33 年のうち 1847 年からの 20 年間は小説家との兼業期間と言える。退職後も 1882 年の死の時まで小説の執筆と出版を続けた。

もっとも、人がいつから小説家であるのかはなかなか決定が難しい。小説家になる決心をした時なのか、あるいは、発表の当てはなくとも構想を練っている時なのか、あるいはまた、やがて公刊第一作となる作品をこつこつと書いている時なのだろうか。

トロロプの第一作 *The Macdermots of Ballycloran* の執筆開始は出版の 4 年前の 1843 年であったことを考慮し、その時点で、郵政省職員 Trollope はすでに小説家でもあったとみなせば、兼業期間は少し長くなって 24 年となる。いずれにしても、Trollope は、20 年以上にわたって、郵政省の役人の仕事と多作な小説家の仕事を両立させたのである。兼業は、Trollope の場合、小説家としての仕事にとってマイナスではなかったようである。本論の目的は、いくつかの文献を参照しながら、小説家 Trollope が郵政省勤

務から得たものについて考察することである。

## 2

Trollope は 1834 年 11 月 4 日にロンドンの General Post Office (郵政省) に採用され、そのままロンドンの本省で事務的な仕事に従事していたのだが、1841 年 7 月 29 日に、アイルランド中部地区の postal surveyor's clerk (郵便監督官付き事務官) に任命され、9 月 15 日にダブリンに赴いた。したがって、ロンドンの本省勤務はほぼ 7 年ということになるが、この間の郵政省勤務は Trollope にとってあまり楽しいものではなかったようである。そのことを裏付けるための資料としては、もちろん、Trollope 本人の『自伝』があるが、そのほかに、簡便で信頼できる文献として R. H. Super, *Trollope in the Post Office* (1981)、および、浩瀚な伝記として N. John Hall, *Trollope: A Biography* (1991) があり、たとえば、Hall の Trollope 伝を見ると、“Trollope insists that during the whole of his seven years in London he was ‘hopelessly in debt.’” とある (Hall 55)。若き Trollope のロンドンでの 7 年間の生活の実態はなかなか一筋縄ではいかない事情がありそうで興味をそそられるが、本論では郵政省勤務という狭い範囲に話を限定する。

基本的な点として、郵政事務官 Trollope のロンドンの本省での勤務時間はどうなっていたのだろうか。それについては、R. H. Super が “The normal working day was from ten to four.” と書いている (Super 3)。10 時出勤なら楽だったろうと我々は推測するのだが、Trollope 本人にはそうでなかったらしい。Hall の記述を引用しよう。

From the first he failed to do well at the Post Office. He was supposed to be at work by ten every morning, but he was seldom on time, having, as he said,

a watch that was 'always ten minutes late'. He quickly 'achieved a character for irregularity'." (Hall 52)

後年の勤勉な Trollope とは全く違って、この時期の彼は時間のコントロールが下手だったようである。

この遅刻常習犯の若い郵政事務官は、実は、作家志望でもあった。彼の母親である Frances Trollope (1780-1863) は、当時、*Domestic Manners of the Americans* (1832) で有名な作家であったから、出版界には何かと縁故もあったはずである。しかし、作家になる決心はしたものの目標達成のための自覚的な努力がなかなかできず苦しんでいた Trollope の様子を Hall は次のように書いている。

He came to this determination before he had been at the Post Office two years. And still months, years went on and he never made the attempt, all the while suffering his own private mental disgrace for no making the attempt. (Hall 68-9)

このようなロンドンでの惨めな状況から抜け出す機会が、役人生活 7 年目の 1841 年 7 月に、Trollope を訪れる。アイルランドへの転勤である。

### 3

ロンドンの本省での Trollope の仕事の内容は一言でいえばデスクワークであった。それがアイルランドでは一変する。机に縛り付けられて常に上司の目が光っているというのではなかった。

ダブリン着の 3 日後、勤務地となるバナガー (Banagher) に赴いた

Trollope は、郵便監督官 James Drought という人物の下で助手として働き始め、最終的には、働きぶりが認められて郵便監督官に昇進することになるのだが、ロンドン時代とは違う仕事の内容について Hall は次のようにまとめている。

Trollope . . . was to be a 'deputy inspector' of country post office books; he was to investigate complaints from the public about mail service; he was to arrange delivery to distant locations within his district, which comprised roughly the ancient province of Connaught. Trollope, who had chafed at the day-long sedentary work of a London clerk, sitting at a desk copying or writing letters all day, took immediately to the physical labour of travelling. A man of far above average physical strength and of seemingly indefatigable energies, he found himself at last. (Hall 82-3)

要するに旅が仕事である。出張すれば旅費と手当が給料に加算される。アイルランドの生活費がイングランドのそれより安かったので、ロンドンでのように借金に追われることもなかった。そのうえ、上司である郵便監督官が猟犬一隊を所有していたのをみならって、Trollope は自分も馬一頭を購入して、キツネ狩りという生涯にわたる趣味を得たのである。

このような勤務内容と勤務形態は、小説家志望の Trollope に、時間的な余裕と自由の感覚をもたらしただろうと推測できる。しかし、それだけではなく、様々な人間観察の機会も与えられたのではないか。R. H. Super によれば、Trollope の兄で文筆家であった Tom Trollope は、弟が郵便監督の業務の中で経験した逸話をたくさん聞かされたので "Memoirs of a Post Office Surveyor" を一冊書けるほどだと言っていたようである。それが実現しなかったのは本当に残念なことだが、Super が2つの話を例として出し

ている。一つは、ある郵便局長が金銭目当てに手紙を横領したとにらんだ Trollope が、夜中に馬で田舎の郵便局に乗り付けて、嚴重に鍵のかかった事務機の引き出しを蹴り開けて、問題の手紙を発見する話であり、もう一つは、マークをつけたソヴリン金貨（1ポンド）を Trollope がわざと手紙に同封して架空の人物宛に発送し、途中の郵便局でこの手紙を抜き取った郵便局長助手の財布の中にマーク付き金貨があることを暴露して横領常習犯を捕らえた話だが、まるで探偵小説のようである（Super 18-9）。

このような地方の郵便局の業務の検査に加えて、郵便監督官の重要な仕事の一つが、郵便集配ルートの方定であった。そのことを Super は、Sir Rowland Hill（1795-1879）の議定委員会報告と Trollope の『自伝』を踏まえて、次のようにまとめている。

... The surveyor determines the length of a walk a letter carrier might reasonably make in a day, arranges the walk to include as many villages and hamlets as he can, determines whether the weekly volume of letters for those places be sufficient to pay the expense (reckoning at a penny per letter), and if it be sufficient, the postmaster general establishes the route. Trollope's effectiveness is evidence of his energy: he himself walked the routes to discover what might be expected of the carriers, or, more often and more expeditiously, went over them on horseback. "It was," he said, "the ambition of my life to cover the country with rural letter-carriers." (Super 21)

人間と土地を自分の目で見回り、それらを効率的に結ぶネットワークを構築するための頻繁な移動が、小説家志望者に絶好の人間観察の機会を提供したことは想像に難くない。第一作のアイデアが生まれた事情は Trollope 自身が次のように述べている。

I was located at a little town called Drumsna, or rather village, in the county Leitrim, where the postmaster had come to some sorrow about his money; and my friend John Merivale was staying with me for a day or two. As we were taking a walk in that most uninteresting country, we turned up through a deserted gateway, along a weedy, grass-grown avenue, till we came to the modern ruins of a country house. It was one of the most melancholy spots I ever visited. I will not describe it here, because I have done so in the first chapter of my first novel. We wandered about the place, suggesting to each other causes for the misery we saw there, and while I was still among the ruined walls and decayed beams I fabricated the plot of *The Macdermots of Ballycloran*. (Trollope 70)

アイルランドでの郵便検査の仕事が、小説家としての仕事に対して大きな貢献をしたことがよくわかる。

#### 4

やがて Trollope はアイルランドでの仕事が評価されて、勤務の籍はアイルランドに残したまま、イングランドに一時的に派遣されて、地方の郵便配達ルートへの調査や改良に当たることになり、その任務の途中で訪れたソールズベリーの大聖堂の周囲を歩いている時、第四作 *The Warden* (1855) の着想が浮かび、これが出世作となる。1860年には正式にアイルランドからイングランドに転勤してイングランド東部地区の郵便監督官となり、鉄道での移動中も小説を書く。さらには、国際郵便ルートの改善の交渉のために何度も海外に使節として派遣される。エジプト、西インド諸島、ア

アメリカ合衆国などである。当時の長い船旅の時間を活用して海外出張中もイギリスを舞台とする小説を書き続けるとともに、当然のことながら、行く先々で異文化を体験し、異国での見聞も勤勉に作品化していった。

異文化体験ということで、あらためて小説家 Trollope の出発点となったアイルランド赴任を考えてみれば、実はこれも一種の異文化体験であったと思われる。その体験は、直接にアイルランドを舞台とする第一作と第二作に結実したのである。第三作はフランス革命を描いた歴史小説であったが、第四作でいよいよ生まれ故郷のイングランドを舞台とする作品を書くことになるが、おそらく、その時点で、売れなかったとはいえ3つの作品をすでに出版した小説家として密かに自信を深めるとともに、アイルランドを深く見るという経験を持った目でイングランドを見たときに、そこに、Dickens の言葉を借りて言えば、“the romantic side of the familiar things”を見出したとしても不思議はない。見慣れた、いかにもイングランドらしい何気ない風景の中に、それを異化するような、静かで深いドラマを組み込むことを可能にしたのは、ロンドンで勤務を始めた郵政省事務官 Trollope のアイルランドにおける郵便監督業務の経験であったのではないかと思われる。

まとめとして、やや抽象的に言えば、小説家 Trollope が郵政省勤務から得たものは3つあり、それらは、郵便監督官という職務がもたらした時間的自由と、人間観察の機会と、そして、多様な意味での異文化体験であったと思われる。

#### 参考文献

Hall, N. John. *Trollope: A Biography*. Oxford: Clarendon Press, 1991.

Super, R. H. *Trollope in the Post Office*. Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1981.

Trollope, Anthony. *An Autobiography*. 1883. Oxford: Oxford World's Classics, 1980.

齋藤九一. 「トロロプ『自伝』研究：アイルランド赴任以前」東洋大学文学部紀要・英米文学科篇『白山英米文学』第33号. 2008.

齋藤九一. 「トロロプ『自伝』研究：第1作執筆から *The Warden* まで」東洋大学文学部紀要・英米文学科篇『白山英米文学』第34号. 2009.